2021年3月期 上期
決算概要

2020年11月5日

テルモ株式会社
Chief Accounting and Financial Officer
武藤 直樹

CAFOの武藤でございます。2021年3月期 上期決算の概要について説明いたします。

おことわり

テルモの開示資料に記載されている業績見通し等の将来に関する記述は、当社が現在入手している情報及び合理的であると判断する一定の前提に基づいており、当社としてその実現を約束する趣旨のものではありません。様々な要因により、実際の業績等が変動する可能性があることをご承知おきください。実際の業績に影響を与えうる重要な要素には、テルモの事業領域を取り巻く経済情勢、為替レートの変動、競争状況などがあります。また、この資料に含まれている製品（開発中のものを含む）に関する情報は、宣伝広告、医学的アドバイスを目的としているものではありません。

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

売上・利益ともに通期ガイダンスに対し早めの進捗

（億円）

	19年度上期	20年度上期	増減率	為替除く増減率
売上収益	3,073	2,833	-8%	-6%
売上総利益	1,715 (55.8%)	1,505 (53.1%)	-12%	-9%
一般管理費	896 (29.2%)	859 (30.3%)	-4%	-3%
研究開発費	243 (7.9%)	231 (8.2%)	-5%	-4%
その他収益費用	16	4	-	-
営業利益	592 (19.2%)	418 (14.8%)	-29%	-24%
調整後営業利益	670 (21.8%)	513 (18.1%)	-24%	-19%
税引前利益	581 (18.9%)	407 (14.4%)	-30%	
当期利益	457 (14.9%)	318 (11.2%)	-30%	

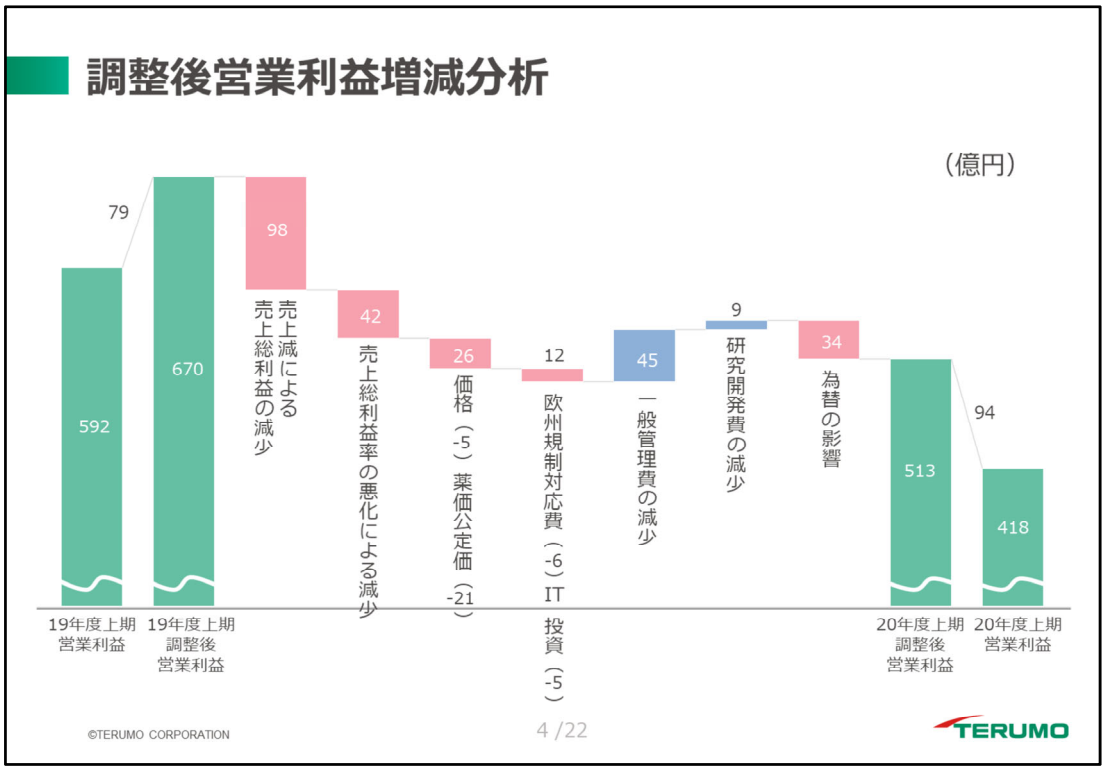
期中平均レート			
	USD	109円	107円
	EUR	121円	121円

- 売上収益：心臓血管の需要が顕著に回復。他のカンパニーへの新型コロナ影響は依然として軽微
- 調整後営業利益：売上減少による減益。一般管理費、研究開発費はメリハリをつけたコントロール

©TERUMO CORPORATION

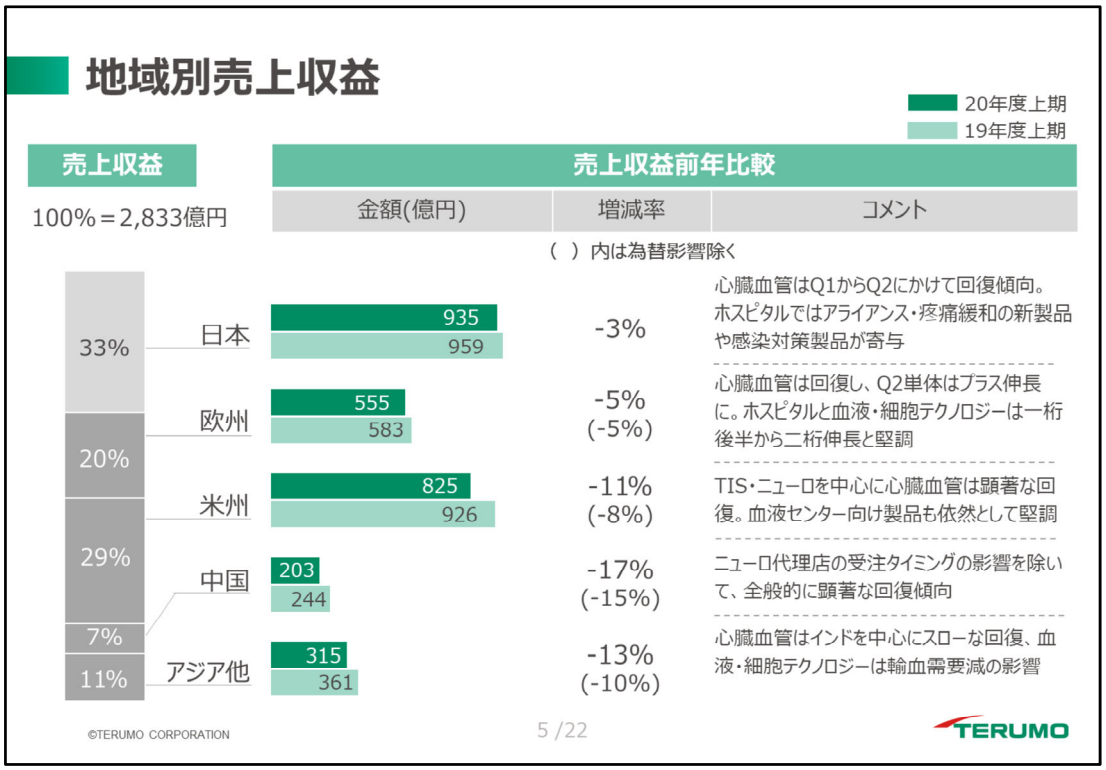
TERUMO

売上収益は、心臓血管カンパニーにおいて、Q1に新型コロナの影響による需要減がありましたが、Q2に入り顕著な回復が見られました。ホスピタルや血液・細胞テクノロジーカンパニーへの影響は、引き続き軽微に留まり、総体で8%減、為替を除くベースでは6%の減収まで回復しました。
調整後営業利益は、Q1と同じく、高収益な心臓血管カンパニーの減収影響を受けましたが、費用については、徐々に営業活動のレベルが上がる中でも、緊急度や中長期業績への貢献度を評価して、案件ごとに抑制を図りました。その結果、為替を除くベースで19%減、営業利益は24%の減益となりました。
当期利益においては、前年同期比で30%の減益となりました。
8月に今期のガイダンスを発表いたしましたが、Q2における心臓血管のカンパニーの回復が想定を上回ったことで、売上収益、利益ともに早めの進捗となりました。

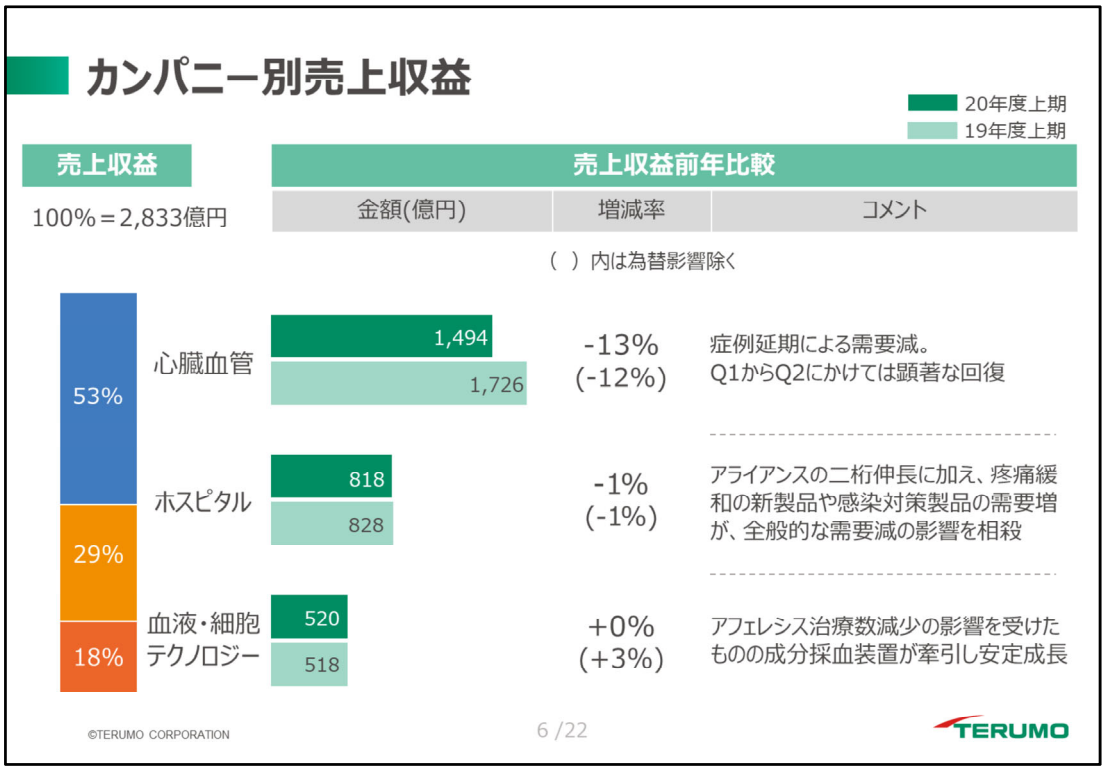


前年同期比での調整後営業利益の増減分析です。
「売上減による売上総利益の減少」は、主に心臓血管カンパニーの売上減少で98億円のマイナスとなりました。しかしながら、顕著な売上回復が見られたことから、Q2の減少分はQ1と比べて大幅に縮小しました。
「売上総利益率の悪化による減少」は、心臓血管カンパニーの減収がQ2に縮小したものの、上期を通しては依然ミックスの悪化が残り、42億円のマイナス要因となりました。一部の国における感染拡大やロックダウン等が散見された中、医療を止めないために製品の安定供給を守るべく、Q2においても生産レベルや在庫レベルを高く維持した結果、Q1と同様に、製造原価を若干押下げ、総利益率の悪化に対する一定の緩和効果がありました。
「価格下落」では、心臓血管カンパニーの売上減少により、下落の影響は5億円と控えめになり、薬価公定価改定の影響は、消費増税に伴う改定がなかった前年度上期との比較で21億円となりました。
「欧州規制対応費」、そして「IT投資」は、プロセスが順調に進み、6億円そして5億円と、それぞれ前年同期比で費用が増加しました。
「一般管理費の減少」については、営業活動レベルが徐々に上がってきているものの、Q2においても依然、病院へのアクセス制限や学会のリモート化による販促費や旅費の縮小があったこと、さらに、案件ごとに緊急性等の吟味を徹底することで、メリハリのあるコントロールを行った結果、上期としては前年度比45億円のプラス要因となりました。

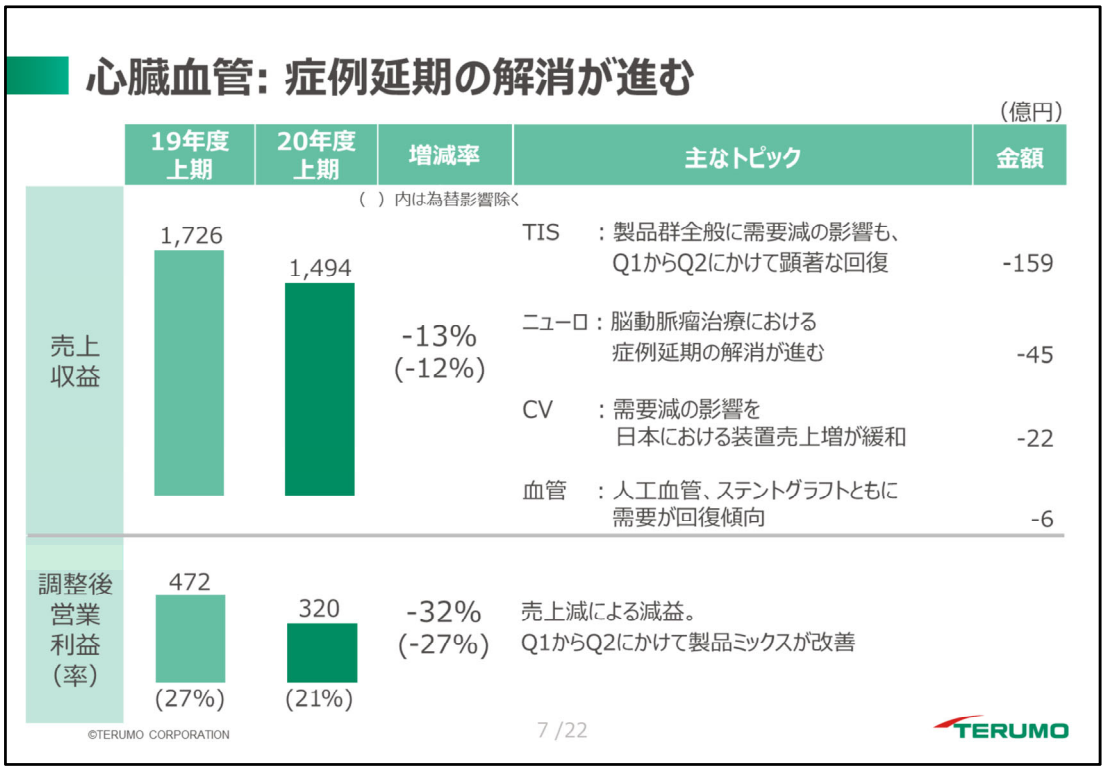
研究開発費においても、原則投資を緩めずとしながらも、プロジェクトごとに優先度を再検証し、前年同期比9億円のプラスとなりました。
「為替の影響」は、新興国通貨が円高に推移したことで、前年同期比で34億円のマイナス要因となりました。



地域別売上収益です。
日本では、心臓血管カンパニーがQ2にかけて順調な回復傾向を見せたことに加え、最大の割合を占めるホスピタルカンパニーが前年度並みに戻ったことで、全体の減収幅が縮小しました。
欧州また米州は、心臓管カンパニーにおいて顕著な回復が見られたことで、減収幅が大幅に縮小しています。
中国は、ニューロにおける代理店からの受注タイミングの影響を除き、Q2単体で見ると前年度並みとなり、全般に顕著な回復を示しています。
アジア他は、フィリピンやインドを中心に需要の回復が遅れています。



カンパニー別売上収益です。
心臓血管カンパニーは、上期全体として、待機症例の延期による需要減の影響を受けましたが、Q2単体を見ると、いずれのセグメントも著しい回復を見せました。
ホスピタルカンパニーは、医療器全般において需要の減少が見られましたが、アライアンスや疼痛緩和製品の二桁伸長や感染対策製品の需要増がそれを押し返し、前年度並みの水準を維持しています。
血液・細胞テクノロジーカンパニーは、アジアを中心とした全血採血の需要減やアフェレシス治療の延期がありましたが、成分採血装置の増収が牽引し、全体として安定成長となりました。
次のスライドより、カンパニー別に詳しくお話しいたします。



心臓血管カンパニーです。
売上収益は、上期13%の減収となりました。
一方Q2単体では、2%の減収にまで戻しています。TISとCVはQ2単体で一桁前半の減収、ニューロは前年度並み、血管はプラス伸長と、全事業において症例延期の解消が進んだことを背景に、Q2において顕著な回復が見られました。
利益においては、売上収益の減少により減益となりましたが、収益性が高く、かつQ1において落ち込みがとりわけ大きかったTISやニューロが、Q2に著しく回復したことにより、減益幅が減少したとともに、利益率も改善してきました。

ホスピタル: 需要減の影響をアライアンスと感染対策製品でカバー

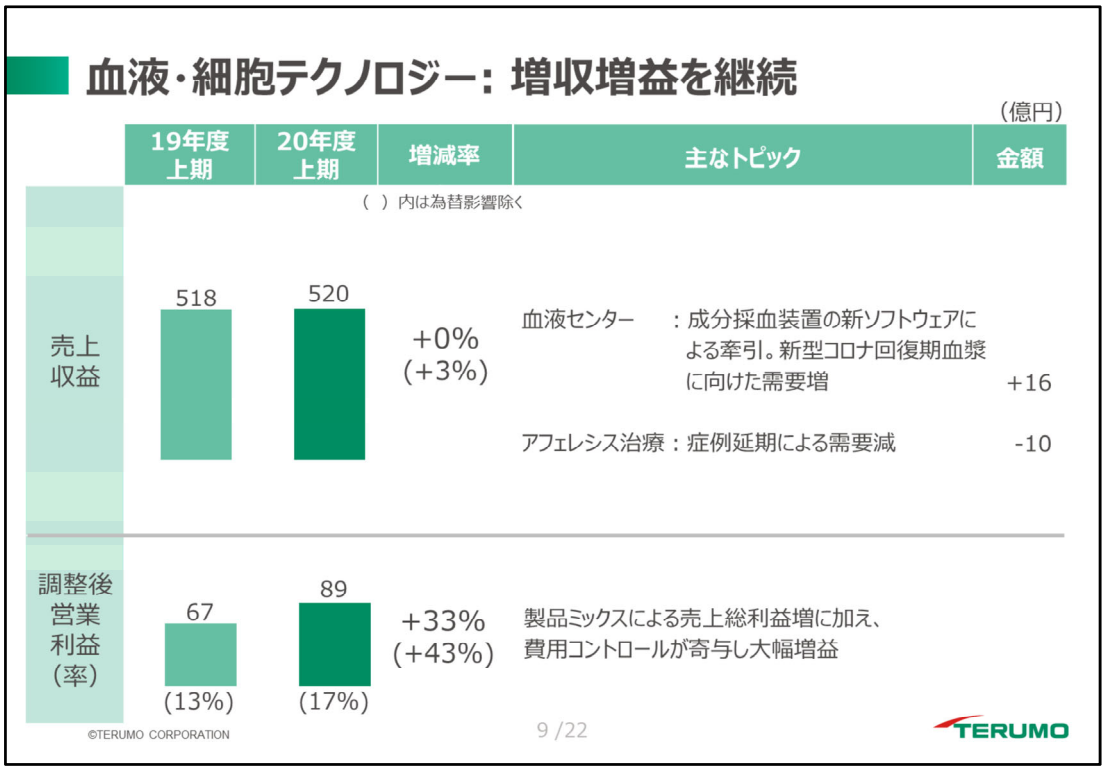
（億円）

	19年度上期	20年度上期	増減率	主なトピック	金額
			（ ）内は為替影響除く		
売上収益	828	818	-1% (-1%)	医療器 ：日本とアジアにおいて診療制限の影響が依然大きい	-29
				医薬品 ：輸液剤の減少を疼痛緩和がカバー	-2
				DM・ヘルスケア: 体温計等ヘルスケア製品の需要増	＋8
				アライアンス ：日本・海外ともに二桁伸長	+13
調整後営業利益（率）	126 (15%)	117 (14%)	-7% (-6%)	売上減少に加え、生産稼働率の低下の影響を、アライアンスの好調な売上と、継続的な費用コントロールにより最小化	

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

ホスピタルカンパニーです。
売上収益は、医療器や医薬品において診療制限による需要減の影響を受けましたが、疼痛緩和製品やアライアンスの二桁伸長、ならびに体温計や消毒剤等の感染対策製品の需要増により、全体として前年度並みとなりました。
利益においては、ロックダウンの影響でフィリピン工場の生産稼働率が低下しましたが、費用コントロールによって、その影響を最小化しています。



血液・細胞テクノロジーカンパニーです。
売上収益は、血液センター向けの事業で、アジアにおける全血採血の需要減があったものの、成分採血装置の効率を改善したソフトウェアアップデートがQ1から引き続き好評を得たこと、さらに、新型コロナの治療に向けた回復期血漿の需要増もあり、堅調な伸長を見せました。
一方、アフェレシス治療は待機症例となり、延期が多く、新型コロナの影響を受けました。
血液・細胞テクノロジーカンパニー全体として、為替を除くベースで3%の増収となりました。
利益は、収益性の高い成分採血の比率が高まったことによるミックス改善に加え、一般管理費を中心に費用をコントロールした結果、大幅増益となりました。

業績予想の修正

（億円）

	従来予想	今回修正予想	修正額
売上収益	6,000	6,000	±0
営業利益（率）	850 (14.2%)	900 (15.0%)	+50
調整後営業利益（率）	1,030 (17.2%)	1,080 (18.0%)	+50
当期利益	650	680	+30

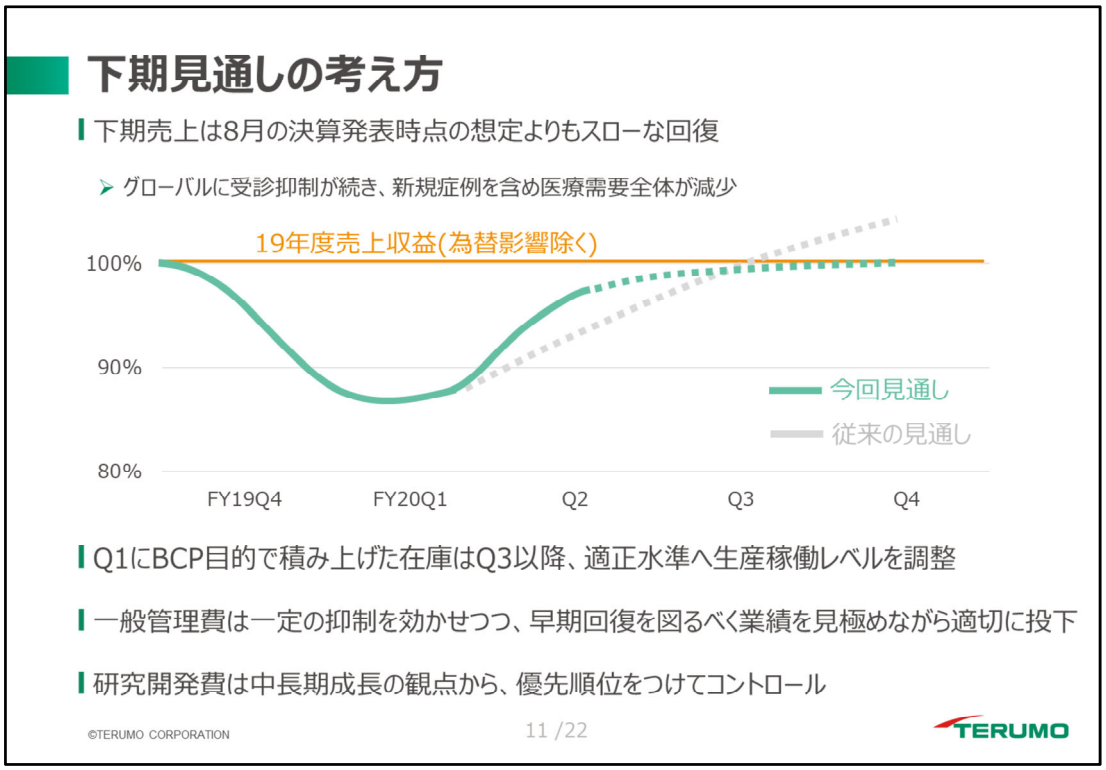
予想為替レート		
USD	105円	106円
EUR	120円	121円

- 上期に想定を上振れした分を織り込んだ修正
- 配当に関し、5月決算時に発表した予想から変更なし

©TERUMO CORPORATION

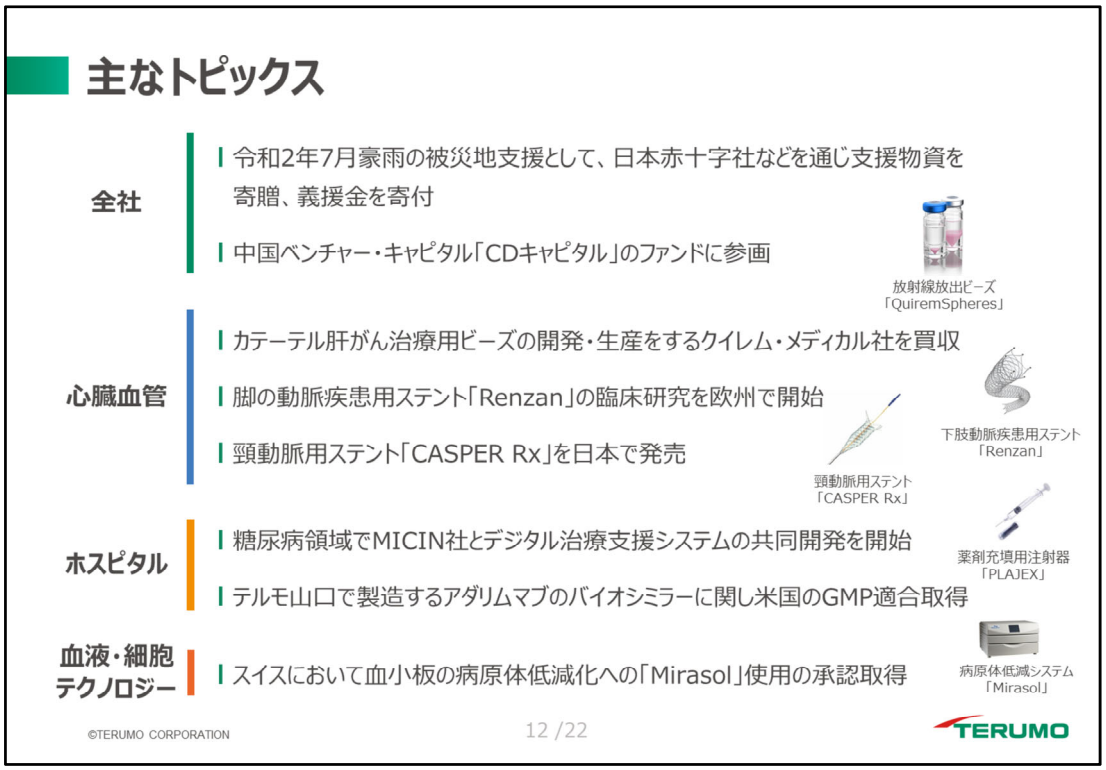
TERUMO

続きまして、業績予想の修正です。
冒頭お話しいたしました通り、Q2における心臓血管カンパニーの回復が想定を上回ったことを背景に、8月に発表したガイダンスと比べ、売上収益、利益ともに早めの進捗となっています。
この状況を踏まえ、上期に上振れた利益相当分を織り込み、調整後営業利益と営業利益は50億円、当期利益は30億円、それぞれ上方修正いたします。
なお、配当につきましては、今下期は依然として、海外における新型コロナの再拡大等の不透明感やリスクを伴っていることから、5月発表の予想を据え置いています。



下期見通しの考え方について説明いたします。
まず売上収益です。前述の通り、Q2において、心臓血管関連の症例数が戻ってくる中、顕著な回復が見られました。待機症例のバックログ解消によるところが大きいのではないかと見ております。
少し懸念しておりました、待機症例の解消による症例数の再落ち込みも、足元10月の売上速報を見る限り、その心配はなさそうで、このまま年度内には前年水準に戻ると想定しております。
一方で、海外、特に欧州を中心に新型コロナの再拡大が懸念されています。医療現場では新型コロナを踏まえたプロトコルや体制が整備されてきていることから、第1波の時のような医療の停滞は起こらないものと考えますが、受診抑制が継続され、新規症例の戻りが遅くなる等の可能性は否定できません。
これらを踏まえ、売上収益は、下期も基本回復傾向が続くものの、当初想定よりも傾斜は緩やかになり、Q4で昨年度並みのレベルに戻るものと見方を修正。上期売上はガイダンスと比べ強かったものの、下期に弱含む可能性を鑑み、通期の売上予想を据え置くこととしました。
Q1にBCP目的で積上げた在庫は、下期に生産稼働レベルを調整し適正水準に戻していく予定です。下期売上が想定よりも弱含むならば、生産調整も予定より強める必要があり、粗利益にはマイナスと考えます。
費用においては、病院へのアクセス制限が緩和されるにつれ、営業活動を活発化させ

る考えは変わらないものの、売上の弱含みや粗利益の下げ圧力を押し返すべく、一般管理費、ならびに研究開発費の吟味をもう一歩進めることで、下期の利益見通しを達成してまいります。



Q2におけるトピックスです。
全社では、令和2年7月豪雨の被災地支援として、日本赤十字社を通じて、支援物資の寄贈と義援金の寄付をいたしました。
カンパニーのトピックスをみますと、心臓血管ではオンコロジーやペリフェラル領域について、ホスピタルではDMやアライアンスについて、そして血液・細胞テクノロジーでは病原体低減化システムと、中長期において成長が期待される領域でのトピックスがならんでおります。

20年度パイプライン製品のローンチ状況

領域	製品	地域	ローンチ
心臓	スティーラブルシース	日	
	PTCAバルーン(Essen社製)	中	
イメージング	IVUSカテーテル	日	済み
オンコロジー	生分解性薬剤溶出型ビーズ	欧	
	末梢血管塞栓用プラグ	米	
脳	血流改変ステント	日米	済み
	バルーン付きガイドカテーテル	欧	
	頸動脈用ステント	日	済み
	袋状塞栓デバイス (Woven EndoBridgeデバイス)	日	
カーディオバスキュラー	次世代人工肺	日	済み
	人工心肺装置(再出荷)	日	済み
	オフポンプ用臓器固定器具	グローバル	済み

領域	製品	地域	ローンチ
血管	腹部ステントグラフト	米	済み
医療器	次期シリンジポンプ	日	済み
	次期針刺し防止機構付留置針	日	
	Open-TCI用シリンジポンプ	欧亜	欧：済み
医薬品	強オピオイド鎮痛薬	日	済み
DM・ヘルスケア	次期持続血糖測定器	日	
	血糖測定システム	日	済み
	次期体温計	日	済み

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

最後のスライドになります。今年度のパイプライン製品です。
詳細は割愛しますが、概ね予定通りに新製品のローンチが進んでおります。引き続き新型コロナの影響による遅延に注意してまいります。

今下期は、新型コロナの再拡大等、不透明さはぬぐえませんが、メリハリをつけた費用コントロール等の経営努力を怠ることなく、ガイダンスの達成に向けて邁進してまいります。
皆様、ご清聴ありがとうございました。

参考資料

©TERUMO CORPORATION

事業別・地域別売上収益と伸長率

（億円）

事業セグメント	日本	海外					合計
		計	欧州	米州	中国	アジア	
心臓血管	229 (-8%)	1,266 (-13%)	379 (-10%)	572 (-13%)	161 (-19%)	153 (-13%)	1,494 (-12%)
うち TIS+ニューロ	165 (-12%)	1,041 (-13%)	307 (-11%)	460 (-12%)	148 (-21%)	126 (-14%)	1,206 (-13%)
ホスピタル	648 (-0%)	170 (-2%)	46 (+6%)	41 (+9%)	10 (-15%)	73 (-10%)	818 (-1%)
血液・細胞テクノロジー	57 (-6%)	463 (+4%)	131 (+12%)	212 (+4%)	31 (+20%)	89 (-6%)	520 (+3%)
合計	935 (-3%)	1,898 (-8%)	555 (-5%)	825 (-8%)	203 (-15%)	315 (-10%)	2,833 (-6%)

（ ）内は為替影響除く前年比伸長率

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

販管費

（億円）

	19年度上期	20年度上期	増減	増減率	為替除く増減率
人件費	440	456	+16	+4%	+5%
販促費	95	51	-44	-46%	-46%
物流費	68	69	+1	+1%	+2%
償却費	91	95	+5	+5%	+7%
その他	203	188	-15	-7%	-6%
一般管理費計	896 (29.2%)	859 (30.3%)	-37	-4%	-3%
研究開発費	243 (7.9%)	231 (8.2%)	-12	-5%	-4%
販管費合計	1,139 (37.1%)	1,090 (38.5%)	-49	-4%	-3%

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

四半期の動き

（億円）

	19年度Q2（7-9月）	Q3（10-12月）	Q4（1-3月）	20年度Q1（4-6月）	Q2（7-9月）
売上収益	1,548	1,629	1,588	1,313	1,520
売上総利益	863 (55.8%)	872 (53.5%)	853 (53.7%)	689 (52.5%)	816 (53.7%)
一般管理費	451 (29.1%)	472 (29.0%)	477 (30.1%)	401 (30.5%)	458 (30.2%)
研究開発費	125 (8.1%)	127 (7.8%)	136 (8.6%)	112 (8.5%)	119 (7.8%)
その他収益費用	13	-2	4	5	-1
営業利益	300 (19.4%)	271 (16.6%)	244 (15.3%)	181 (13.8%)	238 (15.6%)
調整後営業利益	331 (21.4%)	314 (19.3%)	266 (16.7%)	217 (16.5%)	296 (19.5%)
四半期平均レート USD	107円	109円	109円	108円	106円
四半期平均レート EUR	119円	120円	120円	119円	124円

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

調整後営業利益: 調整額

（億円）

	19年度上期	20年度上期
営業利益	592	418
調整① 買収無形資産の償却費	+78	+72
調整② 一時的な損益	+0	(※) +23
調整後営業利益	670	513

※ 調整項目

- 買収関連費用
- 訴訟関連損益
- 減損損失
- 事業再編費用
- 損害保険収入
- 災害による損失
- その他一時的な損益

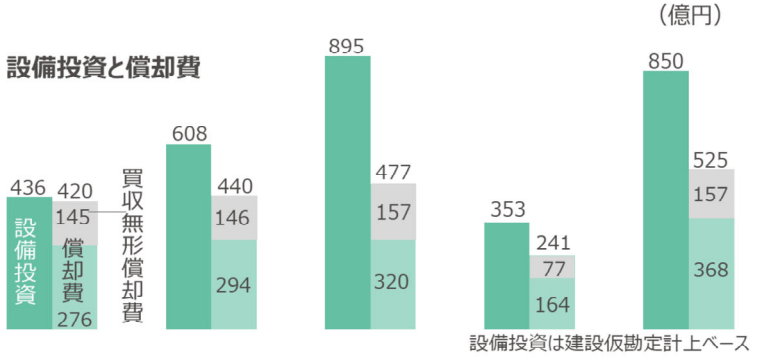
(※)20年度上期 調整②「一時的な損益」の主な項目	調整額
事業再編費用	+3
その他	+19

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

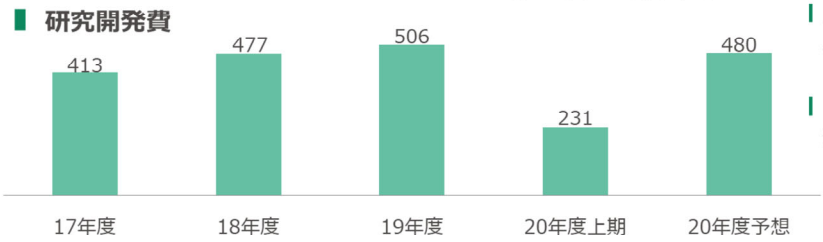
設備投資、償却費、研究開発費

設備投資と償却費



- 19年度・20年度実績・予想にはリース償却（IFRS16)含まず
- 20年度は、増産設備、生産スペース、R&D投資、IT投資を拡大

研究開発費



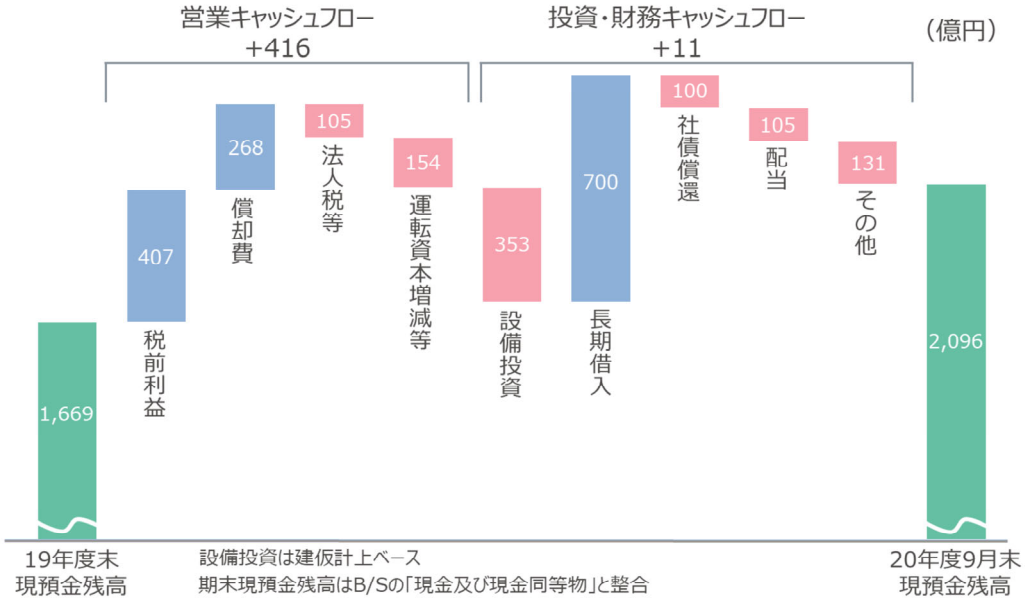
- 主にTIS、ニューロ、血液・細胞テクノロジーの開発活動を促進
- 開発費の資産化は設備投資に含む

18年度　　：24億円
19年度　　：48億円
20年度上期：29億円
20年度予想：54億円

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

キャッシュフロー



設備投資は建仮計上ベース
期末現預金残高はB/Sの「現金及び現金同等物」と整合

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

為替感応度

１円の円安に対しての年間影響額

（億円）

	USD	EUR	人民元
売上収益	17	8	24
調整後営業利益	0	5	13

＜参考＞ 10%円安に動いた時のインパクト

	北米	中南米	欧州		アジア	
			ユーロ圏	その他	人民元	その他
調整後営業利益	-1	10	65	13	20	36

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

転換社債の状況

社債明細（2014年12月起債）

※2019年4月に実施した株式分割考慮

満期	発行額（億円）	金利	転換価格（円）	転換制限価格（円）	転換の場合必要となる株数
2019年12月	500	0.0%	1,912	2,486	約26百万株
2021年12月	500	0.0%	1,912	2,486	約26百万株
計	1,000				約52百万株

転換状況（2020年10月31日時点）

対象社債	転換行使額（対象社債総額比）	交付株数（発行済株式総数比）
2019年12月満期	500億円（100.0%）	26百万株（3.4%）
2021年12月満期	487億円　（97.4%）	25百万株（3.3%）
合計	987億円　（98.7%）	51百万株（6.8%）

- 転換行使による株式交付は自己株式を充当
  - 自己株式の状況： 4百万株(2020年10月末時点、取得単価1,949円、発行済総数比0.7%)

©TERUMO CORPORATION

TERUMO

TERUMO